

# 元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価 —交換留学から英語教育の道へ—

池田 庸子\*

(2018年10月1日受理)

## Life Story Interview of Former Exchange Students: How They Became English Teachers in Japan

Yoko IKEDA\*

(Received October 1, 2018)

### 要旨

日本の大学で約1年間交換留学生として学び、卒業後に日本に戻って英語教育に携わっている元留学生を対象に、ライフストーリー・インタビューを行った。2名の語りから、人生における留学の意義、留学生活における日本語の学習と使用、現在の生活との関連に焦点をあてて、分析を行った結果、以下のことが明らかになった。2人に共通している点として、1) 日本への最初の興味はゲームやアニメなどのコンテンツがきっかけであった、2) 日本留学中は日本語能力の高い留学生が多くいるため、日本語に対し一種の劣等感を抱いていた、3) 日本語に自信を持つようになったきっかけは家庭教師や部活動などの授業外での交流であった、4) 英語教育者として、生徒たちに留学経験のすばらしさを伝えたいと考えている、5) 日本語を身に着けたことで積極的に職場や地域等の日本人コミュニティとの交流を行っており、良好な人間関係を築いている。交換留学を終え、帰国した学生が再び日本に戻って就職するケースも増えている。彼らの声に耳を傾け、長期的な視野に立って、短期留学生に対するどのような日本語教育や留学生支援が効果的か検討が必要である。

【キーワード】 ライフストーリー、元留学生、留学評価、日本語学習、交換留学生

### 1. はじめに

近年、日本語教育の分野でライフストーリー研究が注目されている。日本語学習者の学習動機や学習環境など学習者を取り巻く状況が多様化する中で、日本語授業という時間的にも空間的にも限られた事象に留まることなく、言語を学ぶとはどのようなことか学習者の語りから、より包括的に

---

\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

明らかにしていこうという試みがなされている。三代 (2015; 1) は日本語教育学としてのライフストーリー研究の意義を「人は、社会・文化の中でどのように日本語を学んでいるのか。日本語を学ぶことは、人にとってどのような意味があるのか」を探求することであると述べている。また、河路 (2014; 39) は「彼らの語りをきくことは、人が新しい言語を学ぶことの意味を考える手立てにもなる。言語教育の果たす役割や教師の仕事の意味を確認することもできる」とその意義を述べている。さらに、川上 (2014) は日本語教育におけるライフストーリー研究に関して、それぞれの語りから何を感じとるか、さらには日本語教育へどのように還元していけるのかという視点が重要であると指摘している。

日本語教育におけるライフストーリー研究としては、教師に対する研究と学習者に対する研究の両方が行われている。韓国人留学生のライフストーリーから、コミュニティ形成過程と日本語の学びを分析した研究 (三好 2009)、学部留学生を対象に、自分らしさや職業選択などのアイデンティティに関わる問題と日本語習得との関連性を分析した研究 (中山 2007、2011)、日本で学位を取得し、日本で働いたり、帰国後に研究者となったりしている元留学生に関する研究 (池田・八若 2016、池田・八若 2017、池田 2018) など多様な元留学生を対象としている。これらの多くの研究は日本の大学で学位を取得した元留学生を対象にしている。しかし、近年、数週間から1年未満の短期留学プログラムが増えており、日本で学ぶ留学生の多くが学位取得を目的としない短期の留学生である。短期留学生にとって、留学がどのような意義を持つのか、どのように自身の留学経験を振り返り、評価するのか、プログラム改善のためにも短期留学生の声にも耳を傾ける必要がある。

本研究では、日本の地方大学で交換留学生として約1年間過ごし、母国の大学を卒業した後に日本に戻り英語教育に携わる北米出身の元交換留学生を対象にライフストーリー・インタビューを行い、その語りの中から、人生における留学の意義、留学生活における日本語学習と使用、留学終了後の日本語及び日本との関係を中心に検証する。

## 2. 研究方法

2017年7月に、日本で英語教育関連の仕事に就いている北米出身の元留学生2名にライフストーリー・インタビューを行った。インタビューを依頼する前に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話していただきたい」という大まかなインタビューの内容を伝えておき、協力者の了解を得て、ICレコーダーにインタビュー内容を録音し、それを文字化した。インタビューで語られた内容から、主に1) 人生における留学の意義、2) 留学生活における日本語の学習と使用環境、3) 留学後の日本語及び日本との関係、の3点に関わる内容を中心に抽出し、時系列にまとめた。インタビューはほぼすべて日本語で行われたが、一部英語になる場面があった。英語の発話は筆者が日本語に訳して掲載した。協力者の言葉を極力そのまま伝えるため、会話形式と引用を交えた要約の形式とを併用した。読みやすくするために、助詞等の明らかな間違いは一部修正を加えた。協力者が日本語で回答している場合は、普通の字体で、筆者が翻訳した内容はイタリック体で示した。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号に変更した。

## 3. 語りと考察

### 3.1.1. インタビュー協力者 A さんの略歴

協力者の A さん (男性) は北米出身で、約5年まえに来日し、交換留学生として約1年間日本

の X 大学で日本語等を学ぶ。交換留学終了後に帰国し母国の所属大学を卒業する。卒業後しばらくして交換留学生として住んだ Y 町に戻り、英語講師として民間の英会話学校に勤めている。

### 3.1.2. インタビュー協力者 A さんの語り

#### 《留学以前》

A さんが日本に興味を持ち始めたきっかけはゲームだった。中高生のころ、最初は日本のゲームであることを知らずに、ただゲームをしていたが、そのゲームを日本の会社が作っていることを知り、次第に日本を意識し始めたという。「どこの会社だろう、もっと同じ会社のゲームがやりたい、日本だって気がついて、じゃあ日本のゲームが好きなんだって気がついた。最初はゲーム、それで日本に繋がって、・・・日本に興味があるかもしれない、それで日本のことを調べて、面白いねって、僕にとって日本と僕の国は結構違うから面白い。」次第にゲームからアニメにも興味が広がってくる。「高校の時ぐらいアニメとか見始めて字幕と吹き替えどっちが好きっていう話になって、やっぱりみんな字幕。日本の声優さんがすごくて日本人はそんなに思ってないけど、声もありますけど言語的に全く違うから、これかっこいいね」と述べており、意味は分からないが字幕のアニメを見るようになり、全く未知の言語である日本語への興味を持つようになる。

\* 高校の時は日本語を勉強しようとはまでは思わなかったんですか。

A：そうですね。高校でスペイン語を2年間勉強して、大学1年生の時に何の授業をとるかっていう話になって、やっぱりスペイン語を続けたかったけど、(履修者が) いっぱいで、それで前から興味があったから日本語ちょっと面白そうだなと思って。

\*：もしもスペイン語のクラスに入っていたら日本語は勉強してなかったんですね。

A：そう。それほんと毎日思ってた。その前に他の大学に行きたかった。音楽の。でもそれはちょっとお金がかかりすぎて、そっちは行けなかった。それがあってこの大学があって、スペイン語に入れなくて、日本語を学んだって言う。面白いのは日本語を勉強したから留学できて、また音楽と繋がりができたから、もう本当に。

\*：大学で日本語を勉強したのは授業で勉強しただけですか。

A：そう。でも勉強としてみてなかったかな。そんなに好きだった。勉強というより趣味として勉強した。自分で面白くて。最初は「あいうえお」をこの週が終わったらこれ覚えてくださいって言われたけど、好きで、1日でこれはいけるかなって予習しようって思って気が付いたらもう半分ぐらい終わって。それを毎日一生懸命書きの練習をやって。

\*：何が面白かったんですか。

A：違うから。友達に見せたら全くわからないからそれが面白い。他の人に見せてこれわかる？そしたらわかんない、そして教えてあげる。なんだろうね、そういう面白さを伝えたかったから、先生っていう仕事に興味を持ち始めたかな。新しい情報を伝えるのが面白いって気がついて。それから T 先生(母国の大学の日本語教員)の影響を受けて、T 先生は日本語の先生だけじゃなくて、先生として結構学びました。

出身大学の日本語の教員からも影響を受けたという。また大学間の交流として日本の大学生と英語と日本語を用いた交流を行っており、「趣味とか家族とか音楽とかゲームが好きとか・・・そういう話がありました。で友達になって。友達に会いたい、日本語が使える、そして日本に行ける、いろんなポイントがあって、それで(日本に)行きたかった」と徐々に日本へ行くことに興味を持ったと話している。その教員らが中心となって行っている3週間の日本研修に参加し、地方都市に1

週間滞在し、東京に2週間滞在する。3週間の研修で、一人で電車に乗ったり、日本人学生と交流したりしたことで、日本で生活する自信がついたという。帰国後、留学アドバイザーや日本語教員の支援を受けながら、交換留学に向けた準備を整え、翌年1年間の交換留学生として日本の大学で学ぶ。

### 《留学中の日本語習得》

来日直後は日本語が上手な留学生も多く、また交流のある日本人学生は英語や海外に興味がある学生が中心だったため、日本語によるコミュニケーションに自信を持てなかったという。

\*：日本に来て、最初はどうか。

A：日本語を聞くのはできたけど話すのはまだまだ自信がなくて、最初の3ヶ月ぐらいは日本語を聞いて英語で話すという感じでした。

\*：サークルは入っていましたか。

A：国際交流サークル。楽しかった。楽しかったけど、やっぱり日本語を使わなくていいよって言われたから。日本人の学生が英語を学びたいとか留学生を困らせないためだったようなサークルだったから、話さなきゃっていう気持ちはなかった。

日本人学生との交流では、日本語を話す機会はさほど多くなかったようである。しかし、アジアからの留学生との交流でよく日本語を話したという。「他の留学生に手伝ってもらって、それで他の留学生だと英語は通じない、共通は日本語だから日本人じゃなくても簡単な日本語をお互いに使って、それで自信がついた。相手も頑張って日本語を勉強してるからお互いに頑張ろうっていう感じがよかった。」大学の国際寮には様々な国の学生が住んでおり、お互いに助け合って交流を深めている。英語圏からの留学生が少なく、共通の言語が日本語であったことがよかったようである。

Aさんの生活や人間関係が大きく変わるのが2学期目に吹奏楽部に入部してからである。Aさんは10月に来日し、1学期目の留学を終えた4月に部活動やサークル活動に新入生を勧誘するイベントがあり、そこでAさんは以前から興味があった吹奏楽部に入部することを決める。

A：吹奏楽部の人に会って、それで勇気を持って、楽器がないんですけどって言って。・・・それで日本人の友達とここにちょっと行きたいんですけどと言ったらじゃあ一緒に行こうって。行ったらやっぱり音楽は言語みたいなものだからこれでいけるかなって思って。それで一緒にやっている人が留学生に興味がないと言うか音楽のために来ているから、それで英語できないから日本語をもっと勉強してもっと伸びて。

最初は練習だけの参加だったが、演奏会や最終的にはコンクールにも参加し、交友関係も吹奏楽部中心となる。

\*：吹奏楽部に入って変わった？

A：やっぱり個人として本当に日本語が上手になりたいならサークルに入った方がいい。普通の日本人って言ったらおかしいけど、外国に興味がない日本人と友達ができたら、それが本当に大切。

\*：外国人一人だったのに、部活動を続けられたのはどうしてですか。

A：音楽に興味があって。最初は音楽の専攻やりたかったけどできなかったから。3年間吹奏楽をずっとやらなくて。日本に来て吹奏楽できるんだって。アメリカだと本当に音楽の専門じゃないと入れない・・・たぶん音楽教室に入れない。専門の人だけ。それで音楽が好きだったから、でも3年間ずっとやらなくて忘れちゃったやつを練習したいっていう気持ち

ちが日本語と同じぐらいあったから。以前の友達との時間が少なくなったかなって。日本語の勉強してるか音楽の練習してる。

吹奏楽部入部後は授業以外は吹奏楽部の仲間と過ごすことが多くなる。Aさんは、先輩後輩の上下関係のあるサークル内で、新入生ではあるが、実際の学年は上という複雑な位置であった。先輩には敬語を用いたり、年齢的には下の学生と同期生として遊びに行ったり、日本的な人間関係を客観的に観察しつつ、サークルコミュニティの中で交友を深めていたようである。

### 《留学後の生活》

9月に帰国し、その年の12月に卒業するが、その間母国の大学で日本語の授業の手伝いや日本人留学生のサポートなど積極的に日本語を用いて日本との関りを継続している。卒業後、母校の日本語教員の紹介で日本人の駐在家族の子供に英語を教える機会を得る。英語を教えることに関しては、日本留学中から興味があり、英語教育に関する授業を履修するなど、将来のキャリアとして考慮にいれていた。ただ、日本での英語教師は児童生徒を対象とすることが多いため、子供に対する教育に関しては、当初自信がなかったという。しかし、駐在家庭の子供に教える経験を経て「これ楽しい。やっぱり子供は好きかな」と思えるようになったという。日本での就職に関しては以下のように回答している。

\*：いつ日本で就職しようと思ったんですか。

A：留学の最後の半年で英語教育の授業を二つぐらいとって、それでいろんな大学の先生と繋がりができて、・・・それで楽しかったから、その時は英語の先生はどうかと思って。だんだん興味があがってきて。それで英語の先生になろうかなって。

\*：就職活動はどうしたんですか。

A：ウェブサイトがあって、そのサイトは半分以上英語の先生だけど、いろんな仕事もある・・・応募して面接に来てくださいと言われてたけど、〇〇県（留学していた県）のほうに就職したい、それで1個、2個ぐらい見つかって、今の会社。

現在は交換留学していたY市にある英会話学校で幼児から中学生を対象に英語を教えている。Y市での就職を希望したのは吹奏楽部の仲間がいるためである。日本に戻って、大学の吹奏楽部には所属できないが、地域の吹奏楽団に入り、演奏活動を続けている。職場で中学生と話す際も、吹奏楽の話題が役に立っているという。「中学校だとみんな部活に入るから、吹奏楽やってる人と結構話が合って。一人の生徒がフルートをやりはじめたけど、お母さんも吹奏楽団入っていて僕の演奏を聞きに来てくれて。中学生から見るとその共通点があるから話しやすい。他の先生は先生だけど僕は話せる大人。」中学生との共通の話題があり、その保護者とも音楽を通じて交流があり、良好な関係を築けている。その一方で、「自分が勇気を出さないと友達を作れないっていう感じ、日本に住むと・・・本当に仕事行って帰る。吹奏楽の仲間がないと多分無理かもしれない」と社会人になってから友人を作る難しさも感じている。

### 《日本留学を振り返って》

日本での勉強、生活、人間関係などに関して振り返ってもらった。

\*：振り返って日本留学の経験はどうでしたか。

A：よかった。自分で払うのが問題だったから親に助けてもらったけど、親のおかげでと言うかX大学のおかげで幸せっていう感じ。多分国でこういう生活はできない。こういう仕事は簡単に見つからない。他の大学に行ったらこういう友達は多分作れなくて、日本語も伸びてなくて、それでアメリカに帰って同じ年の人と同じぐらいに、大学卒業したのにバ

イトを二つ三つぐらいして。本当にやりたいことができるってそれが一番いいかな。X大に来てからいろんな繋がりが出て、それに日本語も自然と上がって、やりたいことに気づいて、それでまた戻ってきて、できるって言うのは珍しくて、びっくりした。

\*：やればよかったことは？

A：やっぱりもっと早く吹奏楽をやればよかったかなって思う。半年だけでそんなにできるなら1年間どんだけできるかって。

\*：留学で印象に残っているエピソードは？

A：サークルに入って、全く外国に興味ない人に興味を持たせるって言うのが。今の中学生でも何で英語学ばないとといけないのって。いつも言われたら地図を見せて、これ日本でしょ、これ日本以外だよ、どちらの方が大きいって。やっぱり外国に興味ができるって言う影響ができたら本当によかった。日本人と話して、その留学生がこんなに上達できるんだって思ったら、じゃあ自分もどっか行ったらこんなにできるかもしれない。そうなったらそれがいいかな。

### 3.1.3. Aさんの語りに関する考察

Aさんが最初に接した「日本」はゲームであった。最初は日本製であることを知らず、ゲームそのものに興味を持ち、どこの会社の製品か調べて、たどり着いた先が日本であったが、次第に日本のゲームはアメリカのゲームと様々な点で異なることに気づき、「日本のゲーム」として意識するようになる。その対象はアニメにも広がり、アニメ声優の話す未知の言語である日本語に触れる機会が多くなる。しかし、中学高校の時代はゲームやアニメの分野に限られた興味であったといえよう。Aさんが大学で日本語を履修したのは、希望のスペイン語クラスに入れず仕方なく選んだためである。しかし、単なる偶然ではなく、その他の選択肢の中から日本語を選んだのは、中高生の時の日本のアニメやゲームへの興味が影響している。逆の見方をすれば、大学で日本語授業が開講されていなければ、日本への興味はアニメやゲームに限定されたもので終わっていたのかもしれない。大学等で本格的に日本語を学ぶ機会があることがアニメやゲームへの興味を日本語への興味に転嫁する上で重要な要素となっている。

大学で日本語を学び始め、「趣味として勉強した」と言うほど日本語学習に没頭する。日本語担当の大学教員との出会いから、最初のステップとして3週間の研修に参加するが、最初は行く気がなかったという。教員に声を掛けられ、友人が参加することが分かり、短期であればと行くことを決意する。結果的には3週間での経験が日本で生活することへの自信に繋がり、長期の交換留学へ進むこととなる。さらに、協定大学との学生交流も日本を身近に感じるきっかけとなっている。いきなり長期の留学を不安に思う学生にとっては大学の仲間と参加できる短期研修は最初のステップとして有効であると言えよう。

日本における留学生活は最初から順風満帆だったわけではない。日本語で話しかけられても英語で答えたり、日本語能力の高い他の国からの留学生と自身を比較したり、英語を話す留学生としての居場所は見つけられたものの、同時に物足りなさも感じていた。2学期目に入り、大学の吹奏楽部に入ったことが大きな転機となる。部活動では、日本人学生と音楽が好きな仲間としての交友関係が広がり、日常的な使用言語も日本語になる。日本人学生が英語を話さないことも、Aさんがもっと日本語を勉強したいと思う動機付けになっており、日本語も上達していく。

Aさんが留学を振り返る中で、その当時の小さな選択や出会いが現在につながっていると実感し

ている。もしスペイン語の授業には入れていたら、今の生活はなかったし、先生との出会いがなければ日本にも来ていないだろうとよく考えるという。大学選択の際、音楽を勉強することを諦めたが、結果的には日本に来て音楽活動を再開することができた。吹奏楽部や留学時代の仲間との交流は現在も続いており、英語教師として同じ町で働く今の生活の重要な部分を占めているという。また A さんは留学中に英語教育の授業も履修するなど、異なる言語や文化を学ぶ立場から今度は教える立場に立って自身の留学経験を生徒たちに伝えようとしている。

### 3.2.1. インタビュー協力者 B さんの略歴

協力者の B さん（男性）も A さんと同様に北米出身で、交換留学生として約 4 年まえに来日し、約一年間日本の X 大学で日本語等を学び、その後帰国し所属大学を卒業する。卒業後しばらくして交換留学生として住んだ Y 市に戻り、英語指導助詞として公立の小学校と中学校に勤務している。

### 3.2.2. インタビュー協力者 B さんの語り

#### 《留学以前》

B さんが日本に漠然とした興味を持ったきっかけは日本のアニメだったという。子供のころドラゴンボールなどの日本のアニメを見て、日本アニメが好きになり、その興味は高校時代も変わらず日本文化や日本へと関心が広がっていった。

\*：たくさんの子供たちが日本のアニメを知っていますか。

B：ドラゴンボールとかセーラームーンとか私の歳だとみんな知っています。

\*：どうして日本に行きたいと思ったんですか。アニメが好きな人がみんな日本に行きたいと思うわけではないですよね。

B：たぶん高校生の時（ほかの人は）他の興味がある。でも私いつもずっと好きだったから日本の文化とか。日本に行きたいと思った。本当の理由は多分分からない。私のおじいさん日本に来たから。戦争とビジネスで。

B さんの祖父の一人は戦争で日本にいいイメージを持っていなかったが、もう一人の祖父が 90 年代にビジネスで日本に来日して、B さんが 13 歳のころ、その祖父から「日本はきれいで、面白い建物とかある、行ってください。経験してください」と言われたという。アニメだけでなく祖父からのそう言った言葉も影響しているかもしれないと述べている。日本への興味はあったが、日本語を勉強し始めたのは大学に入ってからだった。大学で日本語のクラスを受講する前に独学で学び始めたという。

\*：どうやって勉強したんですか。

B：インターネットで日本語の教科書を買って自分で勉強して。インターネットで話して勉強しました。会話パートナー。その時にたくさん時間があったから毎日 3 時間ぐらい勉強した。ひらがなとカタカナ自分で勉強した。

\*：どうして自分で勉強しようと思ったんですか。

B：その時私の生活新しい趣味が欲しかったから。日本語面白かったから私勉強してみたい。だから自分で勉強した。その時にまだアニメを見ていたから、いつも日本語を聞いていたから。あまりわからない、でも勉強みたい。だから勉強した。あとは自分で勉強したら、楽しいです。

アニメで日本語を聞いている延長線上に日本語の語学学習があり、インターネット等を利用しながら独学で学び始める。その後大学でも日本語の授業を履修し、本格的な勉強を始める。子供のころからの日本に行きたいという想いと、周囲に日本語を話す相手がいないため、日本に行って日本語を勉強したいという両方の想いから交換留学を決める。

### 《留学中の生活と日本語学習》

Bさんは日本での協定校を選ぶ際に、大学の評判を聞き、また東京のような大都市でない地方大学への留学を希望し、X大学に留学を決める。

\*：留学する前に不安なことがありましたか。

B：ちょっと不安でした。でも留学した人を知ってる。その前にちょっと心配した。でも1か月後、5月は心配しなかった。みんな優しいから楽しかった。

\*：日本に来て、最初のころはどうでしたか。

B：4月は大変だった。例えばシティホールとか全然わからなかった。私なんですか？全然わからない。新しい友達まだいない。だからちょっと寂しい。でも4月の後で友達作ったからもっと楽しくなって、心配しなかった。

\*：4月に困ったことは何ですか。

B：たぶんお金とか料金。漢字読めないからどうしようその感じ。どこで払う。スーパーでこれは何ですか。多分初めてスーパーに行った時に塩を買いたかった。漢字が読めなかったから砂糖を買った。

来日当初は何が起きているか理解できず困ったことも多かったが、日本人や他の留学生の友達もできて、楽しくなったという。学生交流の場としては、国際寮が重要な社交の場になっていたようである、食事会やパーティーの場で他の国の留学生や日本人学生と友達になり、交流の輪が広がっていった。寮のことを「家族、ファミリー」と言い、良好なコミュニティが形成されていたようである。

留学中の日本語学習に関しては、自信が持てず積極的ではなかったと振り返っている。

\*：自分の日本語についてどう思っていましたか。

B：留学して私の友達はもっと日本語が上手だった。・・・授業であまり質問を聞かなかった。よ：どうして聞かなかったんですか。

ベン：たぶん緊張して、心配したから。

\*：緊張したのはずっとですか。

B：それはずっとじゃなくて。上のレベルのクラスに入った時。初めての教科書だったから、難しかったから。緊張の気持ちがあった。

自分より日本語能力の高い学生と比較してしまい、授業で質問をしたり、日本語を話したりするときにも緊張していたようである。結局1年間の留学を通して、自身の日本語に自信を持つことはなかったという。

### 《留学後の生活》

日本での留学を終えて、数か月後に母国の大学を卒業する。その後はAさんと同様に日本人駐在員の子供に英語を教えるアルバイトを約1年間行う。ほぼ毎日日本人家庭を訪問し、子供に英語を教え、お母さんとは日本語で会話をしたという。帰国してから、日本人と話す機会を得たことがBさんにとっては重要な転機となる。



\*：国に帰ってから、もっと日本語を使ったんですか。

B：そうね、漢字書けない。でも話すのはもっと上手になった。まだ読めるもちろん。でも書くのはへた。

\*：日本語を話す自信がつかえましたか。それはいつですか。

B：去年。家族とたくさん話したから。日本人の家族は優しいから「頑張って頑張って」。

Bさんは自身の性格を「静かな性格で、みんなとあまり話さない」と考えており、日本語を流暢に話す留学生が多数いる日本の環境よりも、アメリカで日本語話者が少なく、日本人家族と個人的にじっくり話す機会が持てたことが日本語を話す自信につながったという。

母国に帰って数カ月は、日本に戻ってきたい思いが強く、「ずっと悲しかった」という。「日本語大好きになったから、ここ（Y市）はホームタウンだから、たくさん友達がいるから好き。その生活は大好きだから」とその時の気持ちを述べている。そして、留学時代の友人から都道府県単位で採用している英語指導助手のことを知り、応募する。希望通り、かつて交換留学生として学んだY市で英語指導助手の仕事を得ることができ、現在も充実した日々を送っている。

\*：今の生活は楽しそうですね。子供たちはかわいい？

B：かわいい。子供のことを気に掛けるようになってきた。みんな知っているから。顔を覚えているから。（子供たちの）未来も気になる。

\*：中学生はどうですか？難しくない？

B：生徒は優しい。本当に優しい学校。いい学校。3クラスある。たぶん生徒は300人ぐらい。あんまり大きくない、いいサイズ。みんな顔を知ってる。

\*：日本で働いて日本語はどうですか。

B：私は生徒とあまり日本語を話さない。英語の先生だから。日本人の先生は日本語で話します。そして私の校長先生と教頭先生は関係いいです。教頭先生と校長先生は英語を話さないから、私はいつも日本語。例えば毎朝、学校の前で挨拶。私は英語を話す。でも生徒がいない時に一緒に日本語で話します。

日本語が話せることにより、生徒だけでなく、英語を話さない教員とも円滑なコミュニケーションが取れている。校長先生等と部活動の応援に行ったり、活動に参加したり、通常は英語指導助手が参加しない学校行事等にも参加しているという。

### 《留学を振り返って》

現在から過去の留学経験を振り返ってどう考えるか聞いた。

B：本当によかった。私ラッキー。留学したから、たくさんチャンスがみつかりました。交換留学生だったことは私の人生で最良の選択だったと思う。

\*：やってよかったことは何ですか。

B：留学。交換留学生だったから、たくさんの人に出会えた。

\*：仕事をするのに留学したことは役に立ちましたか。

B：そうです。留学経験はすごく役に立った。今中学生とかに、大学入った時に留学はいいです（と伝えている）。私が中学生の時にそのアドバイスはなかった。他の国に行くイメージはなかった。

\*：それって大事ですね。中学の時に先生に留学したほうがいいよって言われたら、チャンスがあったら考えると思います。

B：今から若い人に会った時に、大学生例えば、「留学して」「留学いい経験です」「絶対に」

どこでも。おすすめは日本。日本人だったら、アメリカとかヨーロッパとかオーストラリアとか。

自分の留学経験を中学生に伝えて、生徒が大学生になったときに留学していい経験をしてほしいと折に触れて伝えている。また、Bさんが勤務する小学校や中学校には、Bさんが交換留学生として学んだ大学から学生がボランティア等で来ることも多く、そこからも人間関係が広がっている。

### 3.2.3. Bさんの語りに関する考察

Bさんが日本へ興味を持つようになったきっかけはアニメであった。子供の時、ドラゴンボールが人気で、他の多くの子供たち同様に、Bさんも興味を持つようになったという。中学や高校になり、アニメに関心を持たなくなる人も多い中で、Bさんはずっと興味を持ち続け、それは日本へ行きたいという強い気持ちになっていく。まず独学で日本語を学び、大学でも授業を取って勉強を始める。「趣味がほしかったから」と述べているように、強制されるのではなく、自分の意志で学ぶのは楽しかったという。現在は、インターネットなどで無料の日本語学習ビデオや教材アプリなども容易に入手できる時代である。Bさんも大学の授業で日本語を履修していたが、他方で、「趣味」のように学んでいた。学習者が授業以外にどのようなリソースを用いて学んでいるのか、授業外の学びの可能性について知ることも必要であろう。

Bさんにとって初めての一人暮らしが日本での留生活だった。母国の大学では両親と住んでおり、いわゆるキャンパスライフをあまり経験していなかったが、日本で寮に住み、日本人や留学生仲間など、多くの友人を作ることができた。しかし、最初は自分の日本語に自信が持てずあまり積極的に日本語を話さなかったという。Bさんは自身の性格がシャイで、緊張したからと述べている。1年の留学で日本語は上達したものの、他の留学生と比較してしまい、結局自分の日本語に自信を持てるようにはならなかったという。

Bさんが日本語話者としての居場所を見つけたのは帰国後の日本人駐在の家庭であった。Bさんは子供たちの英語の先生として、そして数少ない日本語話者として、家庭内で頼りにされ、さらに家族がBさんの日本語を常に褒めてくれたことで話す自信をつけていく。シャイな性格のため緊張して日本語がなかなか話せないという経験があるBさんだからこそ、北米で苦勞している子供たちの気持ちに寄り添うこともできたのだろう。この経験はBさんにとって重要な経験となる。

英語指導助手として日本に戻ってからも、英語で話すことが恥ずかしいと思う児童・生徒たちの気持ちをよく理解したうえで、英語で話すことが楽しくなるようにゲームなども積極的に取り入れながら教えているという。また、中学生には、これからの人生の中で留学という選択肢もあることを自分の経験を踏まえて説得力を持って伝えている。英語指導助手として児童・生徒には英語を話す一方で、職場では日本語でコミュニケーションを取り、他の教職員とも円満な人間関係を構築できている。BさんにとってY市は「ホームタウン」になっている。

## 4. 考察と今後の課題

2人に共通する点としては、子供から高校時代にかけてゲームやアニメなどの日本のポップカルチャーに関心を持ったことが挙げられる。近藤・村中(2011)がポップカルチャーへの関心と日本語学習動機に関する関連を指摘するように、彼らもゲームやアニメをきっかけに日本に興味を持ち、次第にアニメキャラクターの話す日本語自体にも興味を持つようになっている。しかしなが

ら、実際に日本語学習を始めたのは、大学に入ってからであった。Aさんは大学の日本語担当教員の薦めで3週間の短期研修に参加して、X大学を知り、長期の交換留学への参加を決める。また、BさんはX大学留学経験者の上級学生から情報を得ることで、特に不安もなく留学を決めることができたという。継続的な学生交流や最初のステップとしての短期留学が交換留学を決める重要な要素となっていることがわかる。

日本留学中は日本人学生だけでなく、他の国から来た留学生とも盛んに交流している。留学先で多様な国籍や文化背景を持つ友人が作れたことに意義を感じながらも、日本語能力の高い留学生や日本語を専攻として学んでいる学生などと自身を比較して、日本語を話すことに自信が持てなかったとも述べている。これはAさん、Bさん両方に共通していた。交換留学プログラムでは、学習歴や母語の異なる多様な学習者が同じプログラムで学んでいる。日本語のレベルや母語の影響等による習得速度に差があることは当然であり、あまり問題視してこなかったが、学習者が抱くそういった感情にも配慮が必要であることが分かった。友人関係では、外国に興味があり英語を話したいと考える日本人学生と交友関係が広がっている。多くの友人ができてよかったと考える半面、外国人だからではなく、共通の趣味でつながれる友人ができたことに満足感を覚えている。Aさんは吹奏楽部の仲間と自然に日本語で会話するようになり、日本語に自信が持てるようになり、Bさんは母国での家庭教師を通じて自信が持てるようになったと述べている。どちらの場合も、他の日本語学習者と比較することなく、日本語コミュニティの中で必要とされる居場所を見つけているといえよう。留学生にとってコミュニティへの参加が非常に重要な役割を果たしているという報告がされているが(三好2009、池田・八若2017)今回の調査でもコミュニティ参加の重要性が再確認された。

2人は帰国後日本人家族の子供に英語を教えるアルバイトをする。Aさんは留学中も英語教育関連の授業を履修するなど、キャリアとして英語教育を考えていたようである。Bさんは日本に戻りたいという強い思いがあり、日本での就職の可能性を模索する中で、アルバイトを通じて英語教育に興味を持つ。2人ともY市に戻り、Aさんは民間の英語教師として、Bさんは公立小学校・中学校の英語指導助手として活躍している。2人は英語を教えるだけでなく、留学経験者として、外国語を学び異文化で生活することがどのような学びをもたらしてくれるか、そして人生においてどのような意義があるか生徒たちに伝えようとしている。それは彼らにとっても留学の意義を再確認する重要な機会となっている。Bさんが留学を「私の人生で最良の選択」というように、生徒たちにも留学という選択肢があることを示し、未知の世界があること伝えようとしている。

ライフストーリー研究において、日本語が話せることが日本人との交流に重要な役割を果たしていることが報告されているが(池田・八若2016, 2017、佐藤2013、中山2011、三代2009)、2人も日本語によるコミュニケーションが図れており、職場や職場以外の日本人と良好な交友関係を築いている。交換留学の時と同じY市に戻って働いているため、学生時代に築いた人間関係や、特にAさんは音楽を通じたコミュニティで文字通り言葉を超えた付き合いができており、日本の生活における満足度は高い。その一方で、社会人になってから新たな友人ができにくいことに対し、母国の友人付き合いとの違いも感じている。学生として、現在は社会人として日本のコミュニティで生活していく中で、日本語能力に関する自己評価や人間関係も変化している。交換留学生として留学した時は、当然のことながら、日本語能力もさほど高くなく、自身の日本語能力に対する自己評価も高くなかった、しかしそれぞれ日本人コミュニティの中で必要とされる居場所を見つけ、それに伴い日本語にも自信が持てるようになり、十分なコミュニケーションがとれるまでに日本語も上達している。元留学生が教室外の多様な日本語コミュニティの中でどのように成長し、それがど

のような自己実現へとつながっているか留学生の総合的支援の立場から今後も検証していきたい。

## 付記

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 (C) (課題番号 17K02839, 研究代表者: 八若壽美子) の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 池田庸子 (2018) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—研究者夫婦の場合」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』1, 45-55.
- 池田庸子・八若壽美子 (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—出身国の大学教員の場合」『茨城大学留学生センター紀要』15, 13-28.
- 池田庸子・八若壽美子 (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター紀要』14, 49-66.
- 川上郁雄 (2014) 「あなたはライフストーリーで何を語るのか—日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシーズ』14, 11-27.
- 河路由佳 (2014) 「学習者・教師の〈語り〉を聞くということ」『リテラシーズ』14, 29-44.
- 近藤裕美子・村中雅子 (2010) 「日本のポップカルチャー・ファンは潜在的日本語学習者といえるか」『国際交流基金日本語教育紀要』6, 7-21.
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリーから」『早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会』11, 3018-327.
- 三代順平 (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』6, 1-14.
- 三代順平 (2015) 「日本語教育学としてのライフストーリーを問う」『日本語教育学としてのライフストーリー』くろしお出版, 1-22.
- 中山亜紀子 (2007) 「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴: 『自分らしさ』という視点から」『阪大日本語研究』19, 97-127.
- 中山亜紀子 (2011) 「学部留学生対象の日本語教育を考える—中国人男子学生のライフストーリーを通して」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3, 78-85.